

## 自由論題 E (文学 2)

司会：三須祐介（広島経済大学）

E-1 森平崇文（早稲田大学）

「劇評家鄭正秋——『民立報』と『民権報』を中心に」

E-2 大野陽介（大阪市立大学非常勤講師）

「祭りとしてのコンクール——建国初期の伝統劇コンクールをめぐる」

司会：加藤三由紀（和光大学）

E-3 杉谷幸太（東京大学大学院総合文化研究科 DC2）

「李銳の農村小説——「尋根」文学との関連から——」

E-4 南真理（大阪市立大学非常勤講師）

「農村テレビドラマの政治性とその受容」

E-1 (13:30~14:20)

### 劇評家鄭正秋——『民立報』と『民権報』を中心に

森平 崇文

鄭正秋（1888-1935）は20世紀中国を代表する演劇人・映画人の一人である。演劇人としては1910年代に脚本家・演出家・俳優を兼ねて文明戯団体「新公社」等を率い、また映画人としては1920年代以降、脚本家・監督を兼ねて映画会社「明星影片股份公司」の中核を担ったことで知られている。そして鄭正秋に関する研究は主として、演劇と映画の中でも特に後者における業績を扱ったもの、即ち映画人鄭正秋に関するものに集中している。しかし鄭正秋の足跡は演劇・映画に止まらず、清末には劇評家として健筆を振るい、また1910年代には上海に開設された遊楽場の一つである「新世界」が発行する小報『新世界報』の執筆者に名を連ねるなど、新聞人・ジャーナリストとしての一面も看過することはできない。

本発表は20世紀中国の複数のメディアにおいてその基礎を築く役割を果たした鄭正秋の、中でも劇評家としての側面に焦点を当てるものである。

清末民初期上海で刊行されていた新聞『民立報』と『民権報』において、鄭正秋は「麗麗所」や「正秋」等の筆名で多数の劇評を発表している。そしてそのほとんどが京劇に関するものである。

本発表ではこの『民立報』と『民権報』掲載の鄭正秋の劇評を対象に、鄭正秋の劇評の内容や論点を紹介・分析することを通じ、その劇評の特徴を劇評草創期に当たる同時期の京劇評論の中で位置付け、次に鄭正秋の京劇に対する見方とその後の演劇・映画活動との関連性などについて検討する。

## 祭りとしてのコンクール——建国初期の伝統劇コンクールをめぐって

大野 陽介

建国初期に開催された第一期全国伝統劇コンクールは、政府主導による国家規模の演劇コンクールとしては未曾有であり、ここで表彰された優秀作品は建国後の伝統劇改革の成果として全国の劇団に認識され、共有されていく。本発表では、伝統劇の社会的役割に注目しながら、建国初期の伝統劇コンクールの成り立ちを、当時の雑誌や新聞を手がかりに明らかにしてゆく。

建国初期に創られた各地方の文化行政機関は階層化された構造を持ち、そこで行われる各行政レベルの伝統劇コンクールは“報奨”の制度を伴い、“典型”とされる劇団を創り出す役割を担っていた。やがて全国伝統劇コンクールが開催されると、その成果は“典型”劇団によって農村にまで伝播される。そして各地の農村劇団は“典型”劇団になるため、より大規模なコンクールに参加するため農村から省に至る“予選”を経て、中央を目指してゆく。このように、建国初期に各地方で開催された伝統劇コンクールは、党のイデオロギーを全国に浸透させるためのイデオロギー装置でもあった。

一方、建国初期の農村で、実際に伝統劇が上演される場合は、金品の浪費や秩序混乱の傾向があり、さらに建国初期には取り締まりの対象であった卑猥な演目までもが上演されるなど、祝祭的な雰囲気を持っていた。また、農村で開催された伝統劇コンクールも教育的場というよりは、観衆にとっては物見遊山的なイベントとして捉えられていた。このように、農村の人々にとっては、伝統劇が上演される場合は地域の祭りとして受け取られていた。

こうしたコンクールは春節を利用して行われていたが、1959年以後は建国後に新しく設けられた国慶節や五一にもコンクールが行われてゆく。このように、地方でのコンクールの実施は、土着の時間と国家の時間をあいまいにし、観衆や役者の意識を次第に変えてゆくものでもありえた。建国初期の伝統劇コンクールの場合は、党と各地の人々との間の、せめぎあいの中だった。

## 李銳の農村小説 —「尋根」文学との関連から—

杉谷 幸太

李銳（1950- ）は、文革中に下放（山西省）を経験した「知青作家（知識青年世代の作家）」の一人である。1986年の短篇集『厚土』が代表作であり、同時期の日本でも幾つか作品が翻訳・紹介された。しかし現在に至るまで日本で知られているとは言いがたい。

本報告では、まず李銳の初期短篇集『厚土』を、「尋根」文学の中に位置づける。

「尋根」小説の代表作としては、韓少功『爸爸爸』や王安憶『小鮑莊』が挙げられるが、これらの作品では、作家は自身の「知青」性を表面に出さず、農村と自己の関係を作品の外部に括り出すことで、農村を対象化している。

これに対し「尋根」文学のなかには、阿城の『樹王』『孩子王』（先行する映画作品として陳凱歌『黄土地』）のように、農村と自己の関係、さらには知識青年である作家が農村や農民の内面を「描く」ことは如何にして可能か、を問う方向性が存在した。この方向性を持つ作品は、「書くことの根拠を問う」というメタレベルの視線がテキスト内部に存在することになる。李銳自身は「尋根」にコミットしたとは述べていないが、『厚土』は「尋根」文学が持っていたこの問題意識をより先鋭化したものと位置づけられる。

続いて、『厚土』の6年後の中編小説『無風之樹』を『厚土』と比較しつつ分析する。李銳自身、『厚土』を超えようとする努力が『無風之樹』に至って初めて実ったこと、また意識的に異なる文体を採用したことなど、2作品の対比に意識的に言及している。

では、『無風之樹』における李銳の達成とは何か。まず文体の比較から、第一に李銳は、意識内容の反復傾向とそれによる他者理解の困難（理解とはこの反復を抜け出すこと）を提示している。しかし第二に、作家である李銳自身は様々な登場人物の内面をフォークナー的な手法で描いており、上述のメタレベルの問いは解消されてしまっている。この2点がなぜ矛盾なく行われたのか。その解明を報告の最終課題としたい。

## 農村テレビドラマの政治性とその受容

南 真理

中国のマスメディアはそのイデオロギー的影響力から基本的に政府の管理下に置かれている。そのため、中国のテレビドラマもマスメディアの一つとして、その大衆に与える影響の大きさから、その内容や放送について政府による制限を受けている。中国のテレビドラマを特徴づける最も重要なジャンルが、政府側の意向を宣伝する「主旋律テレビドラマ」である。今回の発表では、「主旋律テレビドラマ」の中でも、「和諧社会」を目指すことを目標とするテレビドラマである、農村を題材としたテレビドラマについて考察を行いたい。

2009年の中国統計年鑑によると、中国の農村人口は7億2千万人で、依然として人口の半数以上が農民である。そして日本でも連日報道されているように、都市と農村の格差や幹部の腐敗等に対して中国各地で暴動が頻発しており、政府が目標とする「和諧社会」の実現はかなり厳しい状況にある。こうした状況の中で、2000年から農村を題材としたテレビドラマが高視聴率を獲得し、人気を博している。これには、農村問題を重視する政府側が農村テレビドラマの制作を支援しているという背景がある。しかし政府側の働きかけだけではここまでのブームになるとは考えられない。現在の視聴者側は当然以前のように政治性の強い内容をそのまま受け入れることはなくなり、またテレビ局の市場化が進み、民営の映像制作会社がますます力を有している中で、もはやテレビドラマと市場性は切っても切り離せない関係にある。そのため、こうした農村を題材としたテレビドラマの制作、放送、受容の過程には、政府側のメッセージだけではなく、制作者側、視聴者の思いが現れているはずである。本発表では、なぜ農村を題材としたテレビドラマが人気を博しているのかについて考察し、『劉老根』や『馬大帥』といった、農村ドラマブームの牽引役である「東北劇」を始めとする、農村を題材としたテレビドラマの分析を行う。そしてその中で物語はどのように語られているのか、また視聴者はそれをどう受け止めているのかについて考え、政府、制作者、視聴者の三者のせめぎあいを見ていきたい。